

「今一度、子育てについて共に考えてみましょう」

園長 高杉美稚子

先日、石村萬成堂の社長「石村善五」さんのお話を聞く機会に恵まれました。日本にマシュマロディーを作り、広めた立役者です。これからは和菓子だけではなく洋菓子界にも乗り出そうと、元々、あった「つるのこ」のマシュマロに、頂いたチョコレートを包んで送り返すという発想で始まったのがマシュマロディーの起こりです。又、洋菓子店として、自分の名前の「善」はフランス語で「ボン」「五」は「サンク」という事で、「ボン・サンク」の店を作り、洋菓子界で大成功を収めたことはご存知の方も多いことでしょう。「ボン・サンク」を更に発展させる為にマシュマロだけではなく「ホワイトディー」と名を改めた為に、クッキーやキャンディーも含めたお菓子業界全体に受け入れられ、またたく間に日本中に広がったことは、私の世代なら有名です。でも若い保護者の方なら、「ホワイトディー」が日本から、しかも福岡から始まったなどとは、今の今まで知らなかった方も多いかもかもしれませんね。

石村社長の決断力、即戦力、アイデア力、実行力、そして自己責任を取る覚悟と思慮深さなどは、大変素晴らしく、博多の経済界を問わず、知られています。それだけではなく、石村社長の「社員教育」は見事だそうで、その為、福岡県内外の教育に関する委員を歴任されています。社員教育はそのまま、子育てに通じるものがあるからでしょう。さすがに、石村社長の教育論は含蓄のあるものでした。

最近、大学院で心理学の免許を取り、学校心理士や上級カウンセラーとして学びを続け、保護者の方や職員の話をよく聞き、共感し理解することを最も重要としてきた私は少し、耳がいたいところもありました。しかし、「共感し、理解をする、そして感謝し、共に感動する」という気持ちを基本に、一方で時として石村社長の言う厳しさが必要であることもお話を聞き、感じるがありましたので、石村社長の講演の内容を少し、保護者の皆様にも、お伝えしたいと思います。以下は石村社長のお話の抜粋です。

『今、一番言いたいことは、愛情のあり方に問題があるということである。家庭内においては、過保護がまかり通っている。子どもが嫌がることはさせず、何でも子どもの思い通りにさせる。子どもに自分で判断させないで親が何でも先まわりをして、してあげる。ほしがるものを買ってあげる。子ども同士のけんかや人間関係に親が口を出す。自分で責任をとらせない。子どもを無視して親の感情で動く。自分の子どもの言葉だけ信用し、友人や周りを信用しない。小さな怪我さえもさせないように配慮しすぎている。親が子どもの世界を全て管理しようとする。それを親の愛情だと勘違いをしている。あなたのその子どもへの甘さが子どもをだめにしていくということを声を大にして言いたい。』

学校の先生にも申し上げたい、学級崩壊をしているクラスの先生の8割が優しすぎる先生である。子ども達は席について、先生の話聞く必要がある。原理原則をしっかり示す父性、厳しさが今こそ必要である。人生には、苦勞や困難があつて当たり前である。世の中は、基本的に自分の思い通りには成らないことを教えておくのも教育である。

親にも言いたい。怪我あるとすぐに何を禁止、つらいことがあるとすぐに何を止めさせるというが、その後の感動を味あわずして、成長も教育もない。もっと、子どもの成長を教師を信じて見守る気持ちがほしい。教師は、多少の苦情があつても、へこたれず、この感動を味合わせず教育は出来ない、責任は自分にあるのだから、是非続けるんだと、クラスの集団教育のプロは自分なんだと自信をもって言ってほしい。

今、教育で最も大切にされていることは『生きる力』である。では本当の生きる力とはなんだろうか。生きる力とは、逆境をはねのける力である。逆境が人生のばねになることを、大人は子どもに教えてあげる必要がある。逆境が人生を輝かせるのである。「麦ふみ」というのがあつて麦は踏むから育つのである。親は子どもには、ほしがるものを買ってやらない。そして、自分の人生を語って聞かせてあげることが大切である。

人間は、一度は「型」にはめる必要があると思う。こういうとどうして「型」にはめる必要があるのかと聞く人がいる。「型」とは基本的な人間の生き方の姿勢である。狼にそだてられた「アマラとカマラ」は発見された後、どんなに愛情を持って育てても、人間になれなかったという記録がある。人間として育つ時に人間として育たないと人間にならないのである。だから、基本的な人間としての生き方、が必要なのである。欲望を満たすことと抑制すること、皆が席を立ていけないときは席を立たない、感謝する「有難うございました」という型は人間として生きる基本である。特に最近ではしてもらって当たり前、ちょっとでも気に入らないと文句をいう、まず感謝するという姿勢が足りない、感謝するという型は人間として一番の生きる基本である。

中国には、『恩師の日』がある。中国では教師は何があつても常に尊敬されている。先生が尊敬されていないと教育は出来ないからである。人間は発達する過程で尊敬し、愛されている人からでないと学べないのである。だから、教師は日々精進努力するし、親は、子どもが教師を尊敬できるような言動をする必要がある。親が教師を尊敬しないと、子どもの教育は結果としてうまくいかないからである。日本では、今、これがない。

仏教用語に「守破離」という言葉がある、

1. 「守」とは師の教えをそっくりそのまま守る事。一切師の教え通りにやる。それ以外のやり方は許されない。これは師が長年修練に修練を重ね一つのものを築きあげて来ているわけである。ゆえに経験のない者が批判するのは間違いである。先ず最初は、師が「どのような修練のもとに、どのような考え方どのような態度、姿勢をもっているか」をそっくり学ぶ。言われた事に違反しない。これが基本である。
2. 「破」とは、師のものを自分のものにした上で、そこに自分の新たな工夫、努力を加え「師

の教えから少しずつ抜け出し、脱皮していく段階。

3. 「離」とは、自分の工夫、努力により師の教えから逸脱し、さらに修練を加え、自らが一つの境地を築き上げる。という意味である。

まずは決まりを守る。先人の教えを守る。そして、それが出来て初めて「型」を打ち破ってごらんというのが個性教育である。型にはめられながらも個性は出せる。いや、型こそ個性だ、なぜなら、型の窮屈さを知ったから初めて個性が出るからである。今一度、生きる厳しさを子ども達に教えてほしい。親も教師も。特に親が厳しさを教えることが困難に成っている。もちろん厳しさと優しさの適度な密着が大切なのは、教師は承知のことだろう。だからこそ、その上で教師には勇気を持って厳しさに取り組んでもらいたい。』

以上が石村社長のお話でした。社員教育の中で甘えて、つらい、くるしい、悲しい体験をしなくて育った子どもがやがて成人してから、社会でどうなっていくかを何万人も見て来られた経験から出た言葉でしょう。

又、こんな話も聞きました。石村社長の子息がアメリカ留学での事。農作業中に指を切断されたそうですが、全ての判断を息子さんにゆだねたそうです。そして親ができることはただ一つ。その体験をさせてくれた農場の経営者に有難うと感謝することだったそうです。

息子が帰国することも、残ることも選べる為の配慮ですね。でなければ、農夫は無理やり子息を帰国させていただろう事は想像に難くありません。結果。息子さんは自らアメリカに残ることを選び、今でも、あの時が人生の中で、最も成長したとあってあるそうです。きっと次期社長も安泰でしょう。

やはり教育には、「共感し、理解をする、そして感謝し、共に感動する」という気持ちが基本ですが、一方で時として石村社長の言う厳しさが必要である、あえて自分がそうしていることを自覚した上で、(これが無意識では困るのですが、冷静に自覚をして)何でもはい、はいではなく、出来ないことはできない、ダメのことははっきりだめといえる『頑固親父』が今こそ必要な時代なのかもしれません。

さて、感謝するということの次に教育について私が最も大事に考えることは、感動することです。このことについては、平成12年の10月号の巻頭言にかきましたので以下、補足して掲載いたします。

1年の中でも、子ども達の成長の要となる運動会が終了しました。その意義については、今までも、「園通信」や「ママのてまくら」などでお話してきました。さて、この意味ある運動会は、どれだけ子ども達の心に残ってくれるのでしょうか。

私は、本園の教育の根幹をなす三つの柱の一つに、『思い出と感動を作ること』をあげています。一つ目は、共感と個別性がある所に生まれる本当の心の自立です。二つ目は知ることの喜びを与えることです。教育で大切なことは『心に残る原風景をいくつ作ってあげられるか』であると考えています。『心に残る原風景をいくつ作ってあげられるか』は、自立と知ることの喜び

と密接に結びついて本年の教育根幹をなしています。

共感があるところに初めて感動があります。子どもを産まない前に、隣の子どもが歩いた時ものすごく感動しましたか？。子どもが生まれて初めて歩いた後、お友達の子どもが歩いた時どうでしたか？ 以前より感動したでしょう。本当に良かったねといえたでしょう、それは、自分が経験したことだから、そこに共感があるから感動したのです。

共感がある所に、感動があるのです。感動があるところには共感がある事がお分かり頂けるでしょう。そして、一つ目の教育の考え方から、共感がないと、自立はないのです。共感があるところに初めて真の自立があります。更に感動があるところには思い出が形成され、そこには生命の尊重があります。心の陽だまりとなる原風景をいくつも持っている人は、人の命も自分の命も大切に出来るからです。

以上のことが根底にある人は、常に自己成長があり、人生の幸せについて見極めることが出来、情報を取捨選択し問題解決していく能力や、危機管理能力も身につけていきます。この事の本園の教育との関連と大切さについては本園の保護者の方ならば、既にご承知の事でしょう。

では、心に残る原風景はどうしたら残せるのでしょうか？

ちょっと振り返って見て下さい。皆さんが覚えている記憶の中で一番古いものは、いったいいつ頃のものでしょうか。自分の記憶に残っている一番幼い頃というのは、何歳の頃のことが思い出して下さい。

さて、そのことのヒントになる言葉が、京都大学 霊長類研究所所長 比較行動学の権威正高信夫先生の著書「心と体の不思議「ヒトの本能ってなに？」」の中にあります。

『作家の三島由紀夫は小説の中で、産湯につかった時の、タライの木目を覚えていると書いています。その真意の程はともかく、普通、常人では、生まれて初めて歩いた日の事を記憶に留めているという事はありません。百人ぐらいの人に、一番古い思い出を尋ねても、答えは、大体3歳ころ、せいぜい迷子になったとか、転んでケガをしたとか、断片的なエピソードに落ち着いてしまって、それより過去にさかのぼる事は出来ません。

どうしてでしょうか。それは私たちが自分で経験したことを記憶として定着させる為には、ことばが不可欠であるからです。体験した内容を、「お話」にすることが求められるのです。お話の筋に従って、体験を系統立てて繋ぎ合わせて初めて、情報は蓄えられるのです。そのお話を他人に話して聞かせる言葉の能力が獲得されるのが、まさに3歳頃というわけです。3歳の子どもに「きのうのお昼に、何食べましたか」と訪ねても、まず覚えていません。でも、昼食をとってしばらくして「今日はカレーライスを食べたよ」と語るように仕向けると、その翌日も、メニューは子どもの頭の中に残っています。

話すことで記憶は形成されていきます。ただ、大人は3歳児と違って、口に出さなくても心の中でつぶやいて、どんどん体験をお話に変えることが出来ますが、言葉を習いたての子ども

はそれが出来ません。だから、実際に、音として口から何度も繰り返し発した情報しか残って
いかないのです。それゆえ、覚えていることは、少ないということになります』とあります。

この事が意味することは何でしょうか。『言葉を持たないと全部忘れてしまう』では、言葉
の数の広さと深さが少ない幼児期の原風景はどうしたら残してあげられるのでしょうか。
まさしく、今まで私がお話している、感動を持つことの大切さがここにぴったり当てはまるの
です。

親が感動するからこそ、その感動が言葉となって子どもに返される事の意味の大切さがここ
にあります。人は、感動しなければ、共感しなければ、言葉を発することはあまりありません。
だから、いくつになっても、何人目の子どもでも、人は、特に子を持つ親は感動して頂きたい
のです。(でも、言葉をいくらかけても、悪口や批判ばかりだったりすれば、子どもにとって
良い原風景をつくる事にはなりません。人の悪口を聞いているだけでも心はすさみます。だから、
人が悪口を言うのもあまり聞かないほうがいいのです。)

いつも、プラス思考で、良いところを見出して頂きたいのです。そして、感動して、子ども
に良い言葉をかけてほしいのです。そしてお話を続けて頂きたいのです。そうする事によって、
子どもは言葉を獲得していきます。言葉をもつと記憶に残ります。記憶に残ると、良い原風景
が形作られていくのです。

運動会に鼓笛隊も組体操も必要がないという考え方もあります。私は何ヶ月もかけて練習し
た見事なマーチングバンドは必要がないと思っています。でも雑草教育がいいからといってな
にもしないのは、子どもの能力の臨界期を考える時、原風景を作るためには反対です。

何も難しいことをしなくても、練習期間は正味2週間の鼓笛隊でいいのです。一糸乱れぬ姿
は必要ではありません。皆で心をつににするんだ、心をつにするとこんなに気持ちがいいんだ
という心の芽生えが必要なのです。その中でかわいい衣装を着て出場した思い出は心に残るで
しょう。組体操で皆で心をつにしてやり遂げた思い出は、心に充実感をもたらすでしょう。

最近の若い方は感動することが薄れているといわれています。何もしない保育では、子ども
の変化に気づけず、感動しにくくなっているのかもしれない。でも、鼓笛隊や、組体操を見
たら、感動して子どもに言葉をかけてくれるでしょう。言葉をかければ原風景は作られます。
親が感動して言葉をかけなければ、原風景は作られません、だから、子どもの臨界期と共に、
保護者も園児も教育者も、共に感動できる適時、適量の刺激のあるプログラミングされた教育が
必要なのです。

親が感動しなければ、子どもとの共感は得られません。親の感動があるから、自分の子ども
と共感できるし、共感があるから、他の親とも、他の子ども達とも共感でき、そこで自分以外
の他人や、我が子以外の子どもも認められるのです。そこに、親自身と子どもの自立(個性
のある共感)があります。真の自立があるところには、人とのあつれきもありません。
それぞれが自立していないから、トラブルが起こるのです。感謝がない、感動がない、即ち個別
性と共感がない人は、自立がなく、どんな人間関係においてもトラブルメーカーになります。

このことは、今まで教育方針のなかでお話してきた事ではありますが、親として、子として、人として、それぞれの自立があり、トラブルもなければ、他の家族との良い原風景の輪も広がっていきます。温かい原風景を共有する人間関係は広がります。原風景の輪が大きくなれば、子どもが包み込まれていく陽だまりが大きくなることは当然の事です。

では、運動会が終わって、私達大人が為すべき事はなんなのでしょう。子ども達に、感動したことを伝えることです。子ども達がわかる言葉で、具体的に繰り返しお互いにお話し、感動を再び共にすることが今、まさに為すべき事です。そのようにして、子ども達に心の陽だまりの原風景を少しでも残してあげることが出来たら、子どもが(いいえ大人になっても)いつの日か、疲れ果て羽が折れることがあっても、そこで羽を休め、再び、飛び立つ勇気を持ってくれるに違いありません。心が傷ついた人を休ませてあげる心のゆとりがある子に育つでしょう。自分の命と同様、人の命も大切にすることも子どもにも育ってくれるでしょう。

そのことが、今、まさに、「17歳問題」といわれている、青少年の多感な時期の問題解決に繋がっていきます。手をこまねいてはいけません。今からの実践が大切です。

だから、少なくとも、私達子どもの周りにはいる大人(親と教育者)は、いつも新鮮な気持ちで、感動する人でいましょう。プラス思考で、いい所を見出せる人でいましょう。その心のゆとりを持ちましょう。優しさを持ちましょう。子どもの成長に感謝の心を持ちましょう。運動会の、作品展の〇〇のところがこんな風に素敵だったね。それを子ども達に言って頂く事をお願いするのは、園のため、職員の為では決してないのです。子ども達のより良い育ちの為にお願いすることなのです。子ども達の為に、何か園であるたびに、家庭で何かあるたびに、何もなくても何も無い平和な生活であることに、感謝して、感動して生きていましょう。

人をうらやみながら、悪い所だけを見て文句をいうのは簡単です。上を見れば果てしが無い、下を見てもきりが無い。でも、それではいつになっても自分の幸福感は満足出来ません。

私も50歳が近づいてくると、年を取る意味では誕生日はあまり嬉しいものではありません。でも、別の方向から考えれば元気で今日を迎えられたことに、お世話になった人に有難うと、感謝できる日でもあるのです。物事には、必ず、良い面と悪い面の両面があるのです。どちらに光を、焦点を当てて生きるか、です。それだけで幸福感が変わってきます。それを選択できるのも自分だけです。

自分の周りに幸福(し・あ・わ・せ)♡のドームを作りながら、そのドームごと上昇していけたらどんなにか素晴らしいですね。その為に、自分がいる場所に、自分の周りに感謝して生きましょう。子ども達の為に。自分自身の幸福感の為に。

生きている今日の自分にも有難う。今日一日、働いてくれたあなたにも有難う、生まれてきてくれて有難う。そばにいてくれて有難う。あなたがいるだけでそれでいい。

・・・・・・そんな気持ちで生きていけたら、本当に幸せですね。

ここまで読んで下さった事に心から感謝しながら・・・・・・。